

実社会との接点を重視した課題解決型学習プログラムに係る実践研究  
実施方法等

## 1. 実践校について

実践校名	(こうざきちょうりつこうざきしょうがっこう) 神崎町立神崎小学校		
学科名	生徒（児童）数	学級数	
/	183名	全8学級 通常学級6 特別支援学級2	

## 2. 実践研究の対象

当初の実践研究の対象は「第6学年 36名 1学級」であった。神崎小学校の「総合的な学習の時間」の連続性を鑑みて、第6学年を中心としつつも、「全校児童生徒」を実践研究の補完的な対象とした。

## 3. 実践研究の実施経過

(1) 平成28年度の実践研究の取り組み

## ■実践研究の採択前の活動状況

平成28年5月13日 田植え

こうざき自然塾による実習指導

平成28年5月31日 サツマイモの苗植え

神崎町古原地区の杉山信子氏（農業）による実習指導

平成28年6月20日 大豆の豆まき

こうざき自然塾と寺田本家による実習指導

平成28年6月27日 なたね油しぼり

こうざき自然塾による実習指導

平成28年6月28日 平成28年度第1回校内研究会

千葉県教育庁北総教育事務所より講師を招聘した勉強会

平成28年7月 5日 神崎町の農業の特色

こうざき自然塾による出前講義

## ■実践研究の始動準備

平成28年7月27日 審査結果通知：内定

平成28年8月19日 第1回実務者会議（於 神崎小学校）

研究代表者と実践校担任と実践研究の運営方針を確認・修正

平成28年8月26日 文科省と千葉大学での契約締結

平成28年8月29日 第2回実務者会議（於 神崎小学校）

研究代表者と実践校の校長と実践研究の運営方針を合意

#### ■実践研究の前半開始

平成28年9月26日 道の駅の視察見学（神崎小職員研修）

木内正義副駅長による道の駅「発酵の里こうざき」の施設紹介と講義

平成28年9月30日 稲刈り体験教室

こうざき自然塾と寺田本家による実習指導

平成28年10月13日 枝豆の収穫体験

こうざき自然塾と寺田本家による実習指導

平成28年11月～平成29年3月 「食の達人」の学習（第5学年総合学習の課題）

平成28年11月7日 神崎町まちづくり課職員による講義

澤田聡美さんによる神崎町の特色についての講義

平成28年11月14日 大豆の収穫体験教室

こうざき自然塾と寺田本家による実習指導

平成28年11月15日 平成28年度第2回校内研究会

千葉県教育庁北総教育事務所より講師を招聘し、研究代表者も参加した勉強会

平成28年11月16日 神崎町まちづくり課職員による講義

石橋正彦さんによる神崎町の特色についての講義

平成28年12月13日 第1回社会参画推進委員会（授業参観日）

実践研究の年度計画について保護者向け説明会と講演会を行った。

平成28年12月26日 第3回実務者会議（於 千葉大学）

研究代表者と実践校学級担任との成果発表会場の下見・意見交換

#### ■実践研究の後半開始

平成29年1月24日 実践研究の平成28年度成果発表会

実践校児童による大学でのセミナー発表や講義登壇

平成29年2月6日～2月20日 千葉大学インターン生の連携活動

実践校のフィールドワークの補助や全学級での授業補助や研究紹介に取り組んだ。

平成29年2月8日 味噌・てんぺ作り

こうざき自然塾と寺田本家による実習指導

平成29年2月9日 日本酒づくり体験教室

寺田本家による日本酒づくりの講義・実習指導

平成29年3月2日 第2回社会参画推進委員会

同日が小学校のPTA懇談会につき、実践研究の年度成果の報告を行った。

平成29年3月12日 「発酵の里こうざき酒蔵まつり」での成果発表

実践校児童と大学インターン生による「総合的な学習の時間」の研究成果の紹介

## (2) 平成29年度の実践研究の取り組み

平成29年4月22日(土) 第1回社会参画推進委員会

実践研究の年度計画について研究関係者に説明を行った。

平成29年6月30日(金) 第1回校内研究会(総合・生活科)

千葉県教育庁北総教育事務所より講師を招聘し、研究代表者も参加した勉強会

平成29年7月14日(金) 実践研究の平成29年度成果発表会

実践校児童による大学でのセミナー発表や講義登壇

平成29年8月23日(水) 第1回実務者会議(於 千葉大学)

研究代表者と実践校担任と実践研究の運営方針を確認・修正

平成29年11月21日(火) 第2回校内研究会(総合・生活科)

千葉県教育庁北総教育事務所より講師を招聘し、研究代表者も参加した勉強会

平成30年2月7日～2月19日(月) 小大教育連携事業

神崎小学校において、千葉大生による授業サポート活動

平成30年2月14日～2月28日(水) 小大教育連携事業

米沢小学校において、千葉大生による授業サポート活動

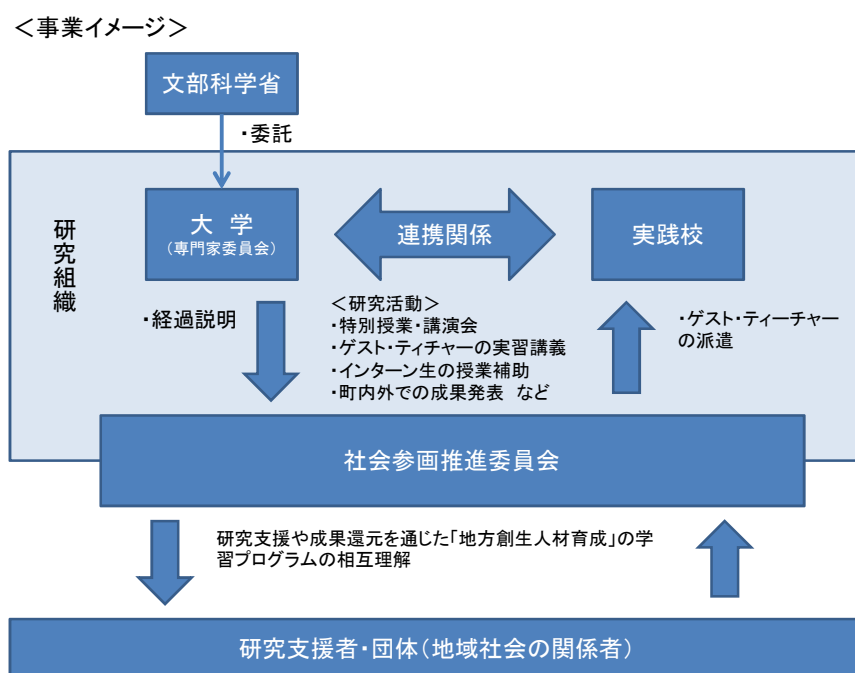
平成30年3月25日(日) 「発酵の里こうざき酒蔵まつり」での成果発表

実践校児童と大学インターン生による「総合的な学習の時間」の研究成果の紹介

#### 4. 実践研究の実施体制

本実践研究は、小川真実准教授（千葉大学法政経学部／キャリアセンター）を研究代表者とする。研究代表者は全体総括を担当する。神崎町の地方創生戦略会議委員を委嘱されており、本務校ではキャリアセンターの兼任教員として千葉大学の実践的なキャリア教育ならびに大学インターンシップの取りまとめを行っているため、本務校、実践校および神崎町との連絡調整も務める。研究分担者は実践校の校長を責任者とし、学級担任が現場指導に当たる。研究代表者と研究分担者との間で、本実践研究の企画・調査の設計を行う。図表1が本実践研究を支える研究関係者の相互関係を示した概略図である。

◆図表1. 実践研究の事業イメージ



また、本実践研究には、地域を研究対象としているため「地方創生」、そして大学と小学校の教育連携を図るため「先進的な教育実践」という特色がある。そこで、研究協力者に、千葉県内の多くの自治体で地方創生戦略の策定に参画した政治思想史・政治学を専門とする関谷教授（千葉大学法政経学部）と、教育の経済学を専門とする佐野晋平准教授（千葉大学法政経学部）を招く。関谷教授と佐野晋平准教授には研究代表者と共に「専門家委員会」を設置し、研究全体設計および進捗状況をレビューしていただく。また、本実践研究の推進に向けて、地域社会から理解を得て協調的な関係を構築するために、平成28年度には関谷教授、平成29年度には佐野准教授より、それぞれの専門の立場から本実践研究の意義についてご講演いただく予定になっている。図表2は、研究組織の体制である。

図表 2. 研究組織の体制

役割	担当者氏名	所属組織・職名	具体的な役割分担
代表者	小川真実	千葉大学社会科学研究院准教授 キャリアセンター副センター長	全体総括
分担者	平井正己	神崎町立神崎小学校・校長	平成 28 年度実践校の代表総括
分担者	一鍬田信吉	神崎町立神崎小学校・校長	平成 29 年度実践校の代表総括
分担者	中村真範	神崎町立神崎小学校・教諭	実践校の学級担任
協力者	小林正樹	神崎町立米沢小学校・校長	平成 29 年度協力校の代表総括
協力者	関谷 昇	千葉大学社会科学研究院・教授	政治学の観点から、地方創生と協働のまちづくりについて助言する。
協力者	佐野晋平	千葉大学社会科学研究院准教授	教育の経済学の観点から、科学的な知見に基づく教育実践を助言する。

また、実践校に「社会参画推進委員会」を設置する。同委員会の会務は「実践校」に委託する。同委員会は図表 3 に記したとおり、大学、実践校、行政、産業界および事務局から構成される。神崎小学校の保護者会開催日を委員会の招集日とする。同日は教育委員会委員や学校評議員なども同委員会にオブザーバーとして招いている。行政ならびに産業界の委員には、実践校におけるゲスト・ティーチャーをお願いしている。さらに、本実践研究の遂行に際して、地域社会の関係者のなかから研究支援者・支援団体を依頼している。研究支援者・支援団体には研究遂行に関連する各種行事の支援をお願いしている。

図表 3. 社会参画推進委員会<20170401 改訂>

属性	担当者氏名	所属組織・職名	具体的な役割分担
実践校	平井正己 一鍬田信吉 二瓶延行	神崎町立神崎小学校・校長 神崎町立神崎小学校・校長 同・教頭	平成 28 年度実践校の責任者 平成 29 年度実践校の責任者 ※社会参画推進委員会事務局を担当
研究代表	小川真実	千葉大学法政経学部・准教授	研究代表者として、実践研究の全体総括
実践校	中村真範	神崎町立神崎小学校・教諭	「総合的な学習の時間」の実施運営
行政	佐藤仁志	神崎町まちづくり課・課長	神崎町政の現場担当として、まちづくりの施策の説明と助言
行政	伊藤道雄	神崎町教育委員会・課長	神崎町教育行政の現場担当として助言
産業界	鈴木正司	こうざき自然塾・代表取締役	第一次産業の代表者として、実習講義などを通じた研究支援
産業界	寺田 優	寺田本家・代表取締役社長	第二次産業（酒造業）の代表者として、実習講義などを通じた研究支援
産業界	木内正義	道の駅「発酵の里こうざき」・副駅長	第三次産業（サービス業）の代表者として、実習講義などを通じた研究支援

◎は委員長、○は委員長代理。

※ 1. 委員長は実践校の校長を充てる。校長に事故がある場合には、教頭が代理を務める。

※2. 必要に応じて、委員を増員することもある。

#### ＜研究支援者・支援団体＞の一覧

神崎町まちづくり課の皆様、こうざき自然塾の皆様、めぐみ農場の皆様、株式会社寺田本家の皆様、道の駅「発酵の里こうざき」の皆様、神崎小学校学習支援ボランティアの皆様、神崎町商工会の皆様（鈴木糰店、月のとうふ、平甚酒店・グリーンサービス）

### 5. 教育委員会等として取り組んだ内容

本実践研究の充実や成果の普及の観点から、研究チームでは、学会発表やマスコミ報道、大学でのセミナー発表や講義登壇、さらには地域の祭事などで、その成果の一部を紹介することとした。

#### 1) 学会発表やマスコミ報道

千葉大学法政経学部准教授の小川真実（研究代表者）が、平成28年11月19日（土）に神戸学院大学にて開催された日本経営管理学会の第7回西日本地区大会にて、第2報告「地方創生人材の育成と大学の役割—大学インターンシップと小学校の『総合的な学習の時間』との連携」で本実践研究の一部を紹介した。神戸市近隣の行政職員も駆けつけ、地方創生の人材育成に向けた関心の高さを伺えた。

研究代表者はまた、日本キャリア教育学会・第39回研究大会（平成29年10月14日及び15日に上越教育大学で開催）に参加し、小大教育連携に意見交換を行った。さらに、日本経営管理学会第8回西日本地区研究大会（平成29年12月2日に名城大学で開催）にて、第1報告「小大教育連携の取り組みと課題」を務め、小大教育連携の進展状況と課題について紹介した。

また、地元日刊紙や全国紙でも、本実践研究の一部が紹介された。「千葉日報」平成28年11月8日（火）付12面（県東版）や「讀賣新聞」平成28年11月8日（火）付30面（地域版）では地元神崎の魅力発信に向けた動画制作の取り組みが紹介された。完成した動画は、地元の道の駅「発酵の里こうざき」で放映される予定となっている。また「小めだか通信2号」の制作配布に向けて、千葉大生のサポートによる取材活動や編集の様子が「千葉日報」平成29年2月18日（土）付13面（県東版）で紹介された。

#### 2) 大学セミナーまたは大学の授業科目での発表

本実践研究の平成28年度の成果発表は、平成29年1月24日（火）に千葉大学にて実施された。千葉大学アカデミックリンクセンターの主催する「あかりんアワー1210」の企画「教員が研究の楽しさを語る」第150回に招待され、研究代表者と実践校とが共同して「小大教育連携の現場より—『総合的な学習の時間』のいま」として、研究の一部を発表した。このセミナー発表には、千葉大学の教職員や学生だけでなく、千葉県教育庁や千

葉市教育委員会の関係者や、県内の自治体職員（佐倉市や鋸南町）が聴講された。同日はまた、千葉大学キャリアセンターの提供する授業科目「地方創生の実務現場1」でも紹介され、200名近くの受講者が参加し、同時に実施した講義アンケートでも高い評価を頂戴した。

また、本実践研究の平成29年度の成果発表は、平成29年7月14日（金）に千葉大学にて実施された。成果発表の場は授業科目「地方創生の実務現場A」において、文書作成ソフトで作成された地域情報誌をプレゼンテーションソフトを活用して報告が行われた。当日は受講者250名近くが詰めかけ、同時に実施した講義アンケートでも高い評価を得た。「地域」をテーマにした研究内容では、小学校高学年の児童でも大学生を圧倒する優れた発表を行うことができることが明らかになった。

### 3) 地域の祭事での活動紹介

本実践研究の平成28年度の成果は、平成29年3月12日（日）に、神崎町の祭事「発酵の里こうざき酒蔵まつり2017」でも、その成果の一部が紹介される。日本酒の祭事では国内有数の規模を誇る祭事であり、JRが臨時列車を運行するほどである。また圏央道の開通にともない、神崎町近郊だけではなく北関東や東京、神奈川からの来場者も多く、毎年5万人の来場者が見込める祭事である。

その祭事のなかで、実践校の児童が「小めだか通信」というかたちで、研究成果の一部を新聞として配布する。また千葉大学では大学インターンシップの学生が中心となって「小めだか新聞」の号外を制作配布したり展示発表を行うことになっている。この様子もまた、地元のケーブルテレビ「CABLE NET 296」のニュース番組「296 NEWS」で放映されることとなっている。

平成28年度に引き続き、平成29年度の成果発表もまた、神崎町の祭事「発酵の里こうざき酒蔵まつり2018」（平成30年3月25日<日>）でも、その成果の一部が紹介される手はずになっている。

### 4) その他

研究代表者は平成28年8月31日（水）に、千葉市教育委員会主催の「第3回キャリア教育推進連携会議～千葉市を担う人材育成プロジェクト～」に臨時委員として招聘され、千葉大学キャリアセンターの取り組みの一つとして、実践研究の内容である「小大教育連携」の取り組みを紹介した。非常に先進的な教育実践として、地方創生の人材育成の現場での導入に向けて、さらなる研究の蓄積や社会実験の実施が要請された。

また、千葉大学キャリアセンターと交流のある県内経営者団体（千葉県経営者協会、千葉県中小企業家同友会）の会員有志との会合において、本実践研究の取り組みを紹介したところ、小大教育連携を通じた人材育成事業に何らかのかたち（人材派遣や寄付）で協力できないかとの申し出を受けているほど、高い評価を得ている。その後、小大教育連携に力を入れる千葉大学キャリアセンターに対して、9社から22万円の寄付金を頂戴した。

## 6. 実践研究の評価等

### 1) 平成28年度千葉県教育功労者表彰の受賞

神崎町立神崎小学校は平成28年10月19日に、千葉県教育委員会より、平成28年度「千葉県教育功労者表彰」の「学校教育の部」を受賞した。その功績調書の概要に記載のとおり、開校以来の先進的な教育実践に取り組む校風は地域の特色とも関連づけながら堅実に受け継がれており、近年では千葉大学との連携を行うことで、さらに先進的な教育実践に挑む姿勢が高く評価されている。先進的な教育実践に対する教育界だけではなく、社会からの要請があることを謙虚に受け止め、期待に沿えるように精進したいと決意を新たにしている。

### 2) 実践校の教員間の連携について：連続する積み上げ型のカリキュラム体系

神崎小学校は、千葉県教育庁北総教育事務所より、主席指導主事と指導主事の教員を講師に迎え、「生活科・総合的な学習の時間」について校内研究会（第1回は6月28日、第2回は11月15日）を開催している。研究代表者も実践校の指定学級を中心に、構内研究科に参加し、実践校の教諭らと「生活科・総合的な学習の時間」について現場の問題意識を共有するとともに、授業展開の改善に向けて意見交換に努めている。生活科では田舎の原風景が残る神崎町の自然への入門的な理解を児童に促し、総合的な学習の時間では発酵を中心としたまちづくりという地域の特色を踏まえて、農作物の生産・加工・販売という六次産業化を体験させ、こうした体験から神崎町の魅力を情報発信したり、地元住民としてまちづくりへの関わり方を、児童に探求させている。このような科目の連携や連続性によって、積み上げ型のカリキュラムに編成されているといえる。それゆえ、教員間の連携は不可欠である。校内研究会などでの定期的な研修や、学校長が先頭を切って、全職員とともに現場を訪問し「地域を知る」活動に取り組んでいることは、その具体的な活動である。また研究代表者も3年間にわたるフィールドワークを通じて、地域を知る活動に取り組んできた。

かくして、実践研究では当初の計画のとおり、第5学年及び第6学年（36名1学級）を実践研究の対象としつつも、積み上げ型のカリキュラムであり、学年進行も考慮して前後の授業内容にも理解を深めることにしている。小大教育連携の現場に参加するインターン学生にも、「生活科」と「総合的な学習の時間」の学習指導要領等の事前学習を義務付け、他の学年や学級との関連づけにも配慮している。

### 3) 地域社会との連携：千葉大学の不祥事に対する地域社会の反応と要請

平成28年度の当初に、千葉大学の学生が未成年者誘拐・監禁事件を起こし、逮捕された。また年末には本学医学部の学生や医師による女子学生への集団暴行事件が起き、現在公判中にある。本学の一連の不祥事が世間に与えた衝撃は大きく、地域社会の不安を高めたことは否めない。そのため、本実践研究の平成28年度の成果発表会に向けて、実践校を通じて保護者から児童の安全に対する万全の措置も求められた。その一環として、保護者同伴とする実践校児童による成果発表会の環境整備および、職員や学生スタッフによる警備業務が加わった。そうした業務の追加により、当初の研究計画にはないコスト負担が



生じた。地域の現場を対象とする研究では、社会的信用の低下が研究遂行のコスト増の要因になることを実感した。

#### 4) 地域社会からの多くの研究支援

神崎町は地元の篤志家が小学校を設立したこともあり、「教育の神崎」として知られている。同町内のもう一つの小学校である「米沢小学校」は校区の全戸がPTA会費を納入するほど、教育への関心は高い。そうした神崎町の土地柄によって、小大教育連携を支援する地元の協力を恵まれた。数多くの地元の方々の協力があったこそ、地元のまちづくりや地域の自然を対象とする「総合的な学習の時間」を展開することができた。本実践研究の仮説の一つである「学校が活性化すれば、地域も活性化する」の検証に向けて、手ごたえを感じるエピソードである。今後の課題は、保護者が積極的に学校を支える活動に関わってくれることを促したい。

神崎町とは、小大教育連携に本格的に取り組む前に、2年間ほどの交流期間があり、地域との付き合いを大学として深めてきたと自負しているが、やはり勉強不足であった。地元の方々の思いを知る努力を重ねていきたい。

#### 5) 特別支援学級の保護者への配慮

神崎小学校では保護者の意向を尊重し、特別支援学級に通っている児童に対して、その事実が特定されないように配慮している。通級指導に力を入れることで特別支援学級の児童が発達段階に応じて通常学級に移行していく教育体制となっている。こうした配慮が保護者の信頼関係の深めている。

今回、実践研究の中間発表会に、神崎小学校5学年1学級の全児童だけではなく、特別支援学級の児童（情緒の不安定）も登壇させ、実際に成果発表の一部を担当させることとなった。当該児童は、大学での成果発表を行ったことで自信をつけ、非常に前向きな学習態度や生活態度を示すようになったと、実践校から報告を受けている。こうした事実は実践研究の当初見込んでいた成果ではなく、思いがけない成果であり、その事実を成果報告書に記載し紹介したいと考えている。しかしながら、その文案をめぐる、保護者との意見調整について未着手の状況にある。

現在は、スクールカウンセラーの所見を参考にしながら、学校長、教頭や担任教諭を交え、保護者の理解を得られる文案作成に取り組んでいる。人権に関する問題であるため、性急に成果を求めることなく、保護者の思いに寄り添う姿勢を示すことを優先した。そのため、平成28年度については実践研究の進捗状況を示す中間報告書の公表を見送り、最終報告書での取り扱いにすることになった。

## 実社会との接点を重視した課題解決型学習プログラム（概要）

実践校名：神崎町立神崎小学校

## 概要

○ 小学校と大学インターンシップとの連携（「小大教育連携」）の活動を通じて、児童に「主体的に問題を設定し解決する力」、「ひと・もの・こととかかわる力」や「将来の展望と社会への参画する力」、そして「与えられた知識や技能を実生活でも適切に活用する力」を育む学習プログラムを開発する。

## 学習プログラムのねらい

- 問題を設定し解決する力
- ひと・もの・こととかかわる力
- 将来の展望と社会への参画する力
- 知識や技能を実社会でも適切に活用する力

## 学習プログラムの主な内容

- ① 昨年度学習内容の振り返りと外部講師による講義  
4年次の「総合的な学習の時間」の成果内容を振り返り、次の段階への展開に向けて、児童に新たな課題の発見を促し、さらなる探究の活動を動機づける。神崎町まちづくり課の職員から、地元「神崎町」の「食」について講義を受け、調査方法や取材対象の選定など研究計画を立案する。
- ② フィールドワーク  
神崎町の「農業の六次産業化」（発酵の里こうざき）の現状と課題という問題意識のもとで、農作物を原材料として加工製造から販売までの各部門の関係者（「食の達人」）に対して情報収集に赴き、食の達人の人柄や信念のみならず、相互の結びつきに関する取材調査を行う。
- ③ グループディスカッション  
「発酵」に関する農業（米、小麦、大豆）、製造業（味噌、醸造業）、サービス業（酒店、道の駅、パン屋）の特色と相互の連続的な結びつきについて、「食の達人」という人的ネットワークの視点から、地域社会を支えている方々に取材を行い、その人物像を整理し、職業や地域に対する思いや考えをまとめる。

#### ④ 発表活動

学級での発表会から授業参観日での発表会を通じて、神崎町の行政職員やゲストティーチャーをはじめ、取材活動でお世話になった方々に指導助言をもらう。

#### ⑤ 課題解決に向けた活動

段階的な発表活動の集大成として、地域の祭事会場での最終発表会（酒蔵まつりでの新聞配布）や大学での成果発表会を行い、TPO（時間・場所・場面）に応じた情報発信する力を高める。

### 学習プログラムの成果の概要

本実践研究の検証に向けて、実践校の学級の「総合的な学習の時間」では診断的授業評価、総括的授業評価ならびに形成的授業評価を実施することとした。また、児童から授業感想を収集し、大学生にはレポートを作成させ、保護者には児童の学習態度や生活態度の変化に関するアンケートを実施している。

#### ○ 学習態度や生活態度の変化に関する数量的評価による検証

診断的・総括的授業評価では、児童は総合学習に対して高い関心や意欲を有していることが明らかになった。また形成的授業評価では、児童は当初、難易度の高い課題に苦戦しているようであったが、関係者の助言を得て、完成の見通しが高まってくるにつれて、数値は上昇し達成感も観察されるようになった。

#### ○ 学習態度や生活態度の変化に関する定性的評価による検証

児童の授業感想や担任教諭及び大学生のレポートに基づいて検証してみると、総合的な学習の時間に対する児童の期待や関心の高さが継続して観察された。とりわけ、探究活動の「まとめ・表現」として行った千葉大学での成果発表は、児童の学習態度に劇的な影響を及ぼしたといえる。学級での発表会などの事前準備の取り組みも大変熱心であったと聞いている。また、大学生がサポートするフィールドワークでは、児童が大学生の手を引き視察先を案内するなど、大変意欲的な行動が見られたという。グループディスカッションでも、大学生の助言を受け入れながら、目標を見失わず、資料の整理や分析に取り組んでいた。

#### ○ 学校の枠組みを超えた教員間の連携強化と地域社会の評価

文科省の実践研究に採択されたことで、千葉大学と神崎町との連携は地元小学校の教育現場での展開を継続することができた。人材教育における「入口」と「出口」に位置する学校の教員同士として連帯的な問題意識を共有しそれを深められたことで、大学生のインターンシップに対する教育現場や地域社会での理解もより一層深まっていった。その結果、地方部にとって都会からの大学生によるサポート活動は歓迎すべき成果として、教育現場でも地域社会でも一定の評価を得ている。